

マラマッドの「魔法の樽」の焦点化

野口 隆*

Focalization in Bernard Malamud's "The Magic Barrel"

Takashi Noguchi*

Abstract

Bernard Malamud's "The Magic Barrel" is not so much fantasy as realism in terms of focalization. Most of the fantastic, or magical, elements in the story is about a marriage broker, Pinye Salzman, and, in such cases, Salzman is almost consistently focalized by a rabbinical student, Leo Finkle. On the other hand, wherever Salzman is also focalized by an external focalizer or Salzman himself, there is no fantastic elements. It is a manipulative effect of the focalization that conjures up the illusion about Salzman.

文学作品の評価の基準が、様々な解釈を誘発すること、そしてその解釈の幅が広いことであるとすれば、バーナード・マラマッド (Bernard Malamud) の短編「魔法の樽」("The Magic Barrel") は間違いなく傑作である。この短編を巡っては、マラマッド自身が "The story has been interpreted in two ways, as realism and as fantasy." (Cheuse 85). と述べているように、それをファンタジーとする解釈とリアリズムであるとする解釈を両極に様々な解釈がなされているが、その要点は作中に登場する結婚仲介人ピニー・サルズマンが、この物語の世界でどのように存在しているのかという問題である。

例えば、クレイン (Marcus Klein) はサルズマンに関して "He is besides either a magician or a demon" (279). と述べ、同じ短編集に収録された「天使レヴィン」("Angel Levine") に登場する黒人の見習い天使アレグザンダー・レヴィン (Alexander Levine) や「憐れみを受け取れ」("Take Pity") のダヴィドフ (Davidov) やローゼン (Rosen) と同じく、この世のものではない存在としてとらえられている。また、アブラムソン (Edward A. Abramson) も "Salzman is almost as unreal as Levine the angel" (133). と、クレインほどではないが、サルズマンに超自然的な要素を認めている。

一方、スローン (Gary Sloan) は "Salzman exists entirely within ordinary determinations. Everything he does is explicable in naturalistic terms" とサルズマンにファンタジー的要素を認めな

い。また、マラマッド自身も、先の引用の直後に "I had meant it to be realistic. . ." (Cheuse 85). と、「魔法の樽」はリアリスティックな作品として書いたと述べている。

ソロタロフ (Robert Solotaroff) は折衷的で、サルズマンに関して "the endearing but scheming pimp" であり "the holy spirit" でもあるという両義性を指摘し (36)、"In the face of irresolvable ambiguity, Leo makes his decision and so too can the reader choose a 'majority reading'" (37). と述べている。

このように「魔法の樽」には様々な解釈があるが、サルズマンが焦点化の対象となっている部分を見ていくと、彼はレヴィンやローゼンやダヴィドフといった他のファンタジーの登場人物とは違って、超自然的な存在などではなく、そうした彼のイメージは焦点化のもつ読者操作の効果の結果生まれたものであることが分かる。

焦点化 (focalization) は元々ジュネット (Gérard Genette) が、それまでの語りの視点の議論の中で、「誰が見ているのか」という問題と「誰が語っているのか」という問題が混同されてきたのを解決するために提示した概念である (186)。そして、ここでは焦点化子 (focalizer) と被焦点化子 (focalized object) の関係が重要であるため、バール (Mieke Bal) の焦点化の概念を用いる。

「魔法の樽」は次のように始まる。

* 総合教育科

Not long ago there lived in uptown New York, in a small, almost meager room, though crowded with books, Leo Finkel, a rabbinical student in the Yeshivah University. (193)

冒頭のこの部分の焦点化子は "an anonymous agent, situated outside the fabula" (Bal 152) なので、このような焦点化子を外的焦点化子 (external focalizer: 以後、EF とする) といい、EF によって焦点化されている物語は「客観的に見える」(Bal 152)。「天使レヴィン」のレヴィンや「憐れみを受け取れ」のローゼンやダヴィドフは EF ではっきりと超自然的な存在であると記述されているのだが、「魔法の樽」のサルズマンにはそのような記述はない。

「魔法の樽」の焦点化子は EF のみではない。第 2 段落では、リオに呼び出されたサルズマンが下宿にやってくるが、その段落の最後の文の途中で焦点化子に変化する。

His voice, his lips, his wisp of beard, his bony fingers were animated, but give him a moment of repose and his mild blue eyes revealed a depth of sadness, a characteristic that put Leo a little at ease although the situation, for him, was inherently tense. (193-4)

この文の "a characteristic" 以降は、それまでの EF には認識することのできないリオの内面が描写されているので、この部分の焦点化子は登場人物のリオであり、このように登場人物を焦点化子とする場合は、どの登場人物が焦点化子となっているかが分かるように、パールに倣って以下 CF(Leo) と呼ぶ。

第 3 段落で焦点化は再び EF に戻り、最後の 2 文で焦点化子は今度はサルズマンに移動する。

Salzman listened in embarrassed surprise, sensing a sort of apology. Later, however, he experienced a glow of pride in his work, an emotion that had left him years ago, and he heartily approved of Finkel. (194)

この部分ではサルズマンの心中が描かれているので、焦点化子は CF(Salzman) である。登場人物を焦点化子とすることの最大の利点は、外からは知覚することのできない登場人物の内面、つまり、台詞として発言していない考えや感想や妄想といったものを焦点化することができることである。また、台詞として登場人物が発言した内容と登場人物が心の中で考えてい

ることは必ずしも一致しないが、CF で描かれていることは、少なくとも焦点化子となっている登場人物にとっては真実である。従って、例えば、リオに問い詰められたサルズマンがステラは自分の娘であると認める場面は、EF でそういう会話が交わされたのは事実であるが、サルズマンが演技をしているのだという可能性はある。

"Why are you so excited?"

"Why, he asks," Salzman said, bursting into tears. "This is my baby, my Stella, she should burn in hell." (212)

一方、第 3 段落で、リオがサルズマンを呼んだ理由を説明する中で、結婚仲介業が伝統的なユダヤ人社会の中で持つ高い価値や、リオの両親も結婚仲介人を通して結婚したという事実を告げられ、サルズマンが自分の仕事に何年も忘れていた誇りを感じたという部分は、CF(Salzman) なので、実際にサルズマンはそう感じたのである。冒頭のこの部分のサルズマン像は、リオを操って自分の娘と結婚させようとする策士からはほど遠い。むしろ、『アシスタント』(*The Assistant*) のモリス・ボーバー (Morris Bober) や「借金」("The Loan") のパネッサ (Panessa) 夫妻のように、マラマッドの作品によく登場する、時代に取り残されたかのような仕事に就くユダヤ人の姿である。

「魔法の樽」の焦点化子は、これまで述べてきた EF, CF(Leo), CF(Salzman) の 3 種類であり、EF を用いる場面が最も多く、基本的に外面的な客観描写や事実の伝達に用いられている。次に多く用いられているのはリオの内面を描くための CF(Leo) である。これは「魔法の樽」という物語が、もうすぐラビになるリオがサルズマンとの花嫁探しを通じて "I came to God not because I loved Him, but because I did not" (204). という痛切な自己認識に至り、イエシヴァ大学を辞めようかとまで思い悩んだ末に、そこから人を愛することによって自分の魂の救済を目指すという、リオの内面のドラマを描いた物語であることを考えれば当然である。一方、CF(Salzman) は上に挙げた例以外では、第 4 段落の後半で花嫁候補者のカードを調べるふりをしながらちらちらとリオの顔を盗み見て彼を品定めする場面の他に 2 箇所を用いられているだけである。

この焦点化子の分布の偏りから分かることは、読者はリオの内面に関しては十分な情報を与えられているが、サルズマンの内面に関して、ほとんど直接的な

情報を与えられないということである。また、パールは CF の分布の偏りに関して次のように述べている。

When in a conflict situation one character is allotted both CF-p and CF-np, and the other exclusively CF-p, then the first character has the advantage as a party in the conflict. It can give the reader insight into its feelings and thoughts, while other character cannot communicate anything. (156-7)

p は外から知覚可能な被焦点化子を、また np は外から知覚不可能な被焦点化子を表す。つまり、内面を直接描かれている登場人物のほうが読者の共感を得やすいということである。

さらにパールは、こういった CF の分布の偏りによって登場人物の間での情報量の不均衡が持つ読者操作の効果を指摘している。

Such an inequality in position between characters is obvious in the so-called 'first-person novels,' but in other kinds this inequality is not always as clear to the reader. Yet the latter is manipulated by it in forming an opinion about the various characters. Consequently, the focalization has a strongly manipulative effect. (157)

「魔法の樽」はパールの指摘する読者操作の好例である。ここでは内面が語られる登場人物がほぼリオだけという状況の中で読者はリオに共感し、サルズマンに関するリオの意見によって読者の中にサルズマンのイメージが形成されていくという構図が見て取れる。例えば、サルズマンの説得されてリリー・ハーシオン (Lily Hirschorn) と会ってみることにするが、リリーとの散歩の間もリオはサルズマンの存在を意識しないではいられない。

... he weighted her words and found her surprisingly sound -- score another for Salzman, whom he uneasily sensed to be somewhere around, hiding perhaps high in a tree along the street, flashing the lady signals with a pocket mirror; or perhaps a cloven-hoofed Pan, piping nuptial ditties as he danced his invisible way before them, strewing wild buds on the walk and purple grapes in their path, symbolizing fruit of a union, though there was of course still none. (202)

CF(Leo) のこの部分から分かることは、サルズマンを超自然的な存在とみることに客観的な根拠は全くないということである。さらに、CF は被焦点化子のイメージ形成に影響を与えると同時に、CF 自身についても情報を与えてくれるが、ここではリオの空想的な性格と自己欺瞞が見て取れる。サルズマンを超自然的な存在とみることには根拠はないが、リオがサルズマンをいつも意識していることには理由がある。リオにとってサルズマンは "commercial cupid" (199) であると同時に、伝統的なユダヤ人社会の価値観を体現した存在でもある。サルズマンには伝統的なユダヤ人社会の中で結婚仲介業は高い価値を持つと言ったりリオではあるが、リリーとの散歩の後でリオはサルズマンにこう言う。

"I am no longer interested in an arranged marriage. To be frank, I now admit the necessity of premarital love. That is, I want to be in love with the one I marry." (207)

それに対するサルズマンの答えは伝統的な価値観を表したものである。"For us, our love is our life, not for the ladies..." (207). つまり、自己欺瞞は本人にはっきりとは認識されていないという点でも、リオにとってサルズマンは超自我のような存在なので、絶えずサルズマンに監視されているようにリオが感じてても何の不思議もないのである。また、リオの空想的な性格や自己欺瞞を考慮に入れると、CF(Leo) の記述は客観性に乏しくリオにとってのみの真実である可能性を常に考慮に入れるべきである。

このように焦点化の観点から「魔法の樽」を読んでいくと、サルズマンが超自然的な存在である根拠となりそうな記述はすべて CF(Leo) であり、EF には存在しないことが分かる。サルズマンに関する記述ではないが、唯一「魔法の樽」をファンタジーと解釈できる可能性がある焦点化は、リオがステラと会う最後の場面にある。

From afar he saw that her eyes -- clearly her father's -- were filled with desperate innocence. He pictured, in her, his own redemption. Violins and lit candles revolved in the sky. Leo ran forward with flowers outthrust. (214)

引用部の第 1 文と第 2 文は焦点化のレベルは無視してこれまでのように表すと CF(Leo) である。第 3 文は焦点化子を特定できるものがないので、第 2 文に連続したリオの心象風景だとすれば CF(Leo) で

あり、EF とすれば、唐突ではあるが、バイオリンとろうそくが空を舞うファンタジーということになる。しかし、仮にその解釈を採用するとしても、それより以前の部分の再解釈を迫るようなものではない。従って、「魔法の樽」はリアリズムであると考えるのが妥当である。

参考文献

- Abramson, Edward A. *Bernard Malamud Revisited*. New York: Twayne, 1993. Print.
- Bal, Mieke. *Narratology: Introduction to the Theory of Narrative*. 3rd ed. Toronto: U of Toronto P, 2009. Print.
- Cheuse, Alan, and Nicholas Delbanco. *Talking Horse: The Life and Writing of Bernard Malamud*. New York: Columbia UP, 1996. Print.
- Genette, Gérard. *Narrative Discourse: An Essay in Method*. Trans. Jane E. Lewin. Ithaca: Cornell UP, 1980. Print.
- Klein, Marcus. "Bernard Malamud: The Sadness of Goodness." *After Alienation*. Cleveland: World Publishing Co., 1962. 247-293. Print.
- Malamud, Bernard. *The Magic Barrel*. New York: Farrar, Straus & Cudahy, 1958. Print.
- Sloan, Gary. "Malamud's Unmagic Barrel." *Studies in Short Fiction* 32.1 (1995): 51+. Questia. Web. 29 Sept. 2012.
- Solotaroff, Robert. *Bernard Malamud: A Study of the Short Fiction*. Boston: Twayne, 1989.